実践真宗学における研究方法の研究

葛野洋明

はじめに

二〇〇九年度に実践真宗学研究科が新設された。新しい学問分野が展開され、実践真宗学の研究は本格的に始まったと言ってもよいであろう。新しい学問分野には、従来の学問体系や研究方法を用いながら、その学問分野に相応しい研究方法が確立されるべきと考える。

実践真宗学の研究は始まったばかりで、実践真宗学における研究方法が完全に確立しているとは言いがたい。しかし、わずか二期の修士修了者を輩出しただけではあるが、実際に実践真宗学の研究は進捗しつつあることも事実である。いわば、研究方法を模索しつつ研究が進捗している段階とも言えよう。

現段階で、実践真宗学における研究方法について全てを網羅し、結論的に明言することは困難である。しかし、いまだその研究方法が明確に確立しておらず、模索しつつ進捗させている段階であるからこそ、研究方法について論じることは、今後の実践真宗学という学問分野にとって意義あることと考える。

一　実践真宗学について

龍谷大学に二〇〇九（平成二一）年度に実践真宗学研究科が新設された。その概要は「社会的要請に実践的・具体的に対応しうる宗教者のあり方について教育・研究するとともに、求められる宗教的実践者にふさわしい高度かつ専門的な素養をもつスペシャリストを育成」するとし、目的には「教理・教義の研究を中心とする既存の文学研究科真宗学専攻が担ってきた教育・研究を基礎として、複雑化・多様化する現代の問題に、実践的・具体的に対応しうる宗教者のあり方について教育・研究するとともに、社会に求められる宗教的実践者にふさわしい高度な専門的素養の修得を図る」と掲げている(1)。

このような研究科が設立されたことは、まさに時代の要請や、宗教者への課題に即応したものであると言えよう。多様化し複雑化する現代社会には、様々な問題が山積している。社会福祉、人権問題、生命倫理、環境問題、エネルギー問題、経済格差の問題など、長い歴史と伝統の上に存在する宗教が、いままで研究領域としてはあまり取り上げてこなかった課題が続出している。

現代に生きる宗教者や、現実社会に社会的に存在している宗教団体は、多様化・複雑化する現代のさまざまな課題に対応することが求められている。

浄土真宗における実践についての研究は、喫緊の課題であり、その多様性や根本を究明することの意義は大きい。

二、実践真宗学における学問分野の傾向

実践真宗学における学問分野は、その研究の多様性によって、さまざまな分野を内包することとなる。実践真宗

学において研究されているのは、布教伝道に代表される宗教的実践だけではなく、ビハーラやカウンセリング、あるいは地域貢献などの社会的実践の分野にも及び、多種多様な研究課題が挙げられている。

多種多様な実践的研究課題に取り組み、実践を重視した研究を進めれば進めるほど、その学問分野は広範囲にならざるを得ない。

例として、ビハーラや緩和ケアにおける実践を挙げてみたい。実践真宗学研究科において、特別講義の講師として招聘した特別養護老人ホーム「ビハーラ本願寺」の中根超信施設長によると、社会福祉行政との折衝も必要となり、また地域との関係性を構築することが重要であり、その上に実際のビハーラ活動の理念や介護のスキルなどが必要とのことであった。また、緩和ケアを行う「あそか第2診療所（あそかビハーラクリニック）」の大嶋健三郎院長の講義や施設見学などを通し、またビハーラクリニックの常駐僧侶から現場の声を聞くと、緩和ケア病棟における常駐僧侶の活動について実践し研究する場合、医師、看護師、薬剤師、栄養士、ソーシャルワーカー等とチームを組んで活動するのであるから、それぞれの専門分野における基礎知識や、理念・考え方などを理解できていなければならないとのことであった。

緩和ケア病棟におけるチーム医療においては、各分野の専門家である医師、看護師、薬剤師、栄養士、ソーシャルワーカー等が、一人の患者に対する一つの対処について専門的知識を結集させ、また各専門分野からの意見を交流させ、総合的に検討するカンファレンスが行われる。そのチームの一員として、宗教者が実践する場合、各専門分野の基礎知識や理念・考え方などを理解していないと、チームの一員とはなれない。

つまり医学、看護学、薬学、栄養学、社会福祉学等の学問分野との交流なしに、緩和ケアの実践を研究することは不可能である。

しかしだからと言って、自らの専門性を希薄にして、各種専門分野の知識や学問分野に精通すれば良いわけではない、宗教者であるという自らの専門性を堅持しなければ、宗教者が緩和ケアにおけるチーム医療において実践する意味は希薄化してしまう。

このように、自らの専門性を堅持しつつ、他の専門分野と深く交流していかなければ、実際の緩和ケア病棟における常駐僧侶としての実践や研究は成し得ない[2]。

いまはビハーラや緩和ケアに関わる実践を例として挙げたまでであるが、その他にもカウンセリングやボランティアなどにおいても同様に、臨床心理学、社会学など、各専門分野の専門知識や理念・考え方を理解し、その上に基本的なスキルをも修得しておかなければならない。もちろん同時に自らが宗教者であるという立脚点を希薄化させずに堅持しなければならない。

三、実践真宗学における研究方法の傾向

広範囲かつ多様な学問分野となる実践真宗学において、その研究方法の傾向は、さまざまな学問分野と交流することで、多様化する傾向となる。

実践真宗学研究科の目的に「教理・教義の研究を中心とする既存の文学研究科真宗学専攻が担ってきた教育・研究を基礎として、複雑化・多様化する現代の問題に、実践的・具体的に対応しうる宗教者のあり方について教育・研究する」と述べられているように、従来の真宗学における研究を基礎としつつ、課題に対応していくことが重要である。

このことは理念的なことではなく、実際に浄土真宗における実践を研究すればするほど、教義との関連や理論的

根拠などの確認の重要性が感じられる。教義との関連や、その理論的根拠などの明確化をせず、単なる多様化をはかるなら、それぞれの専門性は薄れ、研究としては雑薄な研究となる危惧がある。さまざまな専門性をもった学問体系や研究方法と、お互いの専門性を保持しつつ交流し、浄土真宗という専門性に基礎を置いた研究が、実践真宗学の研究には必要である。

現代のさまざまな課題に即応するには、従来の教学的営みのなかでは言及されていないことが多い。その際に現代における課題に対して応える教学がないからと言って、新しい教学を構築するという姿勢だけでは浄土真宗の教義と乖離する危惧がある。新しい課題に対して、新しい教学を構築するという姿勢ではなく、浄土真宗という教義に基づいて、現代におけるさまざまな課題に即応していくことが重要である。[3] 実践的研究課題を取り上げる際に、看過することのできない重要なポイントであろう。

このようなことから、実践真宗学の研究方法においても、親鸞聖人が著された聖教を第一として研究していかなければならない。なぜなら浄土真宗は親鸞聖人によって開顕され、その教法は『顕浄土真実教行証文類』を根本とし、様々な聖教に著されているからである。

では、現代社会における複雑化・多様化する問題に、実践的・具体的に対応しうる宗教者のあり方について教育・研究するために、従来の真宗学における研究と、どのような関係性を持つのであろうか。

実践真宗学研究科を設立する基本的意義について、研究科設立の企画段階から関わり、最初の研究科長に就任された内藤知康教授の「実践真宗学研究科設立の意義」において、

> 真宗・仏教そのものからの実践的な研究の展開とともに、諸科学との学際的かつ総合的・融合的な研究を推進する研究教育機関が必要になる。[4]

と述べられてある。

「真宗・仏教そのものからの実践的な研究」と「諸科学との学際的かつ総合的・融合的な研究」の関係性を考察しなければならない。

四、真宗学における研究方法

従来の文学研究科真宗学専攻の学問的性格では、浄土教理史、真宗教義学、真宗教学史を中心として、文献解釈に重点をおいて文献学や歴史学などの研究方法を用いた教学研鑽を行い、理論的学問研究に特化した特徴をもっていたと言えるであろう。

しかし、従来の真宗学の研究分野においても、真宗伝道学が設定されていた。文学部真宗学科には真宗伝道学に関する演習が設定されており、この真宗伝道学を承けて、文学研究科真宗学専攻においても伝道学に関する演習が設定されている。この真宗伝道学は他の浄土教理史、真宗教義学、真宗教学史に比して、その学問分野が体系化され確立しているとは言いがたい状況といわれており、この真宗伝道学と、実践真宗学の研究における関連は今後の重要な検討課題の一つであると指摘されている。(5)

従来の真宗学の研究は、浄土教の教理や、浄土真宗の教義、またその教学史に関して、大きな成果を上げ、さらに伝道学に関しても研究が進捗されている。

真宗学の研究については、大学令によって龍谷大学と改称した一九二二（大正一一）年前後に、頻繁に議論された。(6)いまその詳細を論じることはしないが、およそ宗教である浄土真宗を、学術的な研究による学問とすることに対しての議論であったと言ってよいであろう。

従来の真宗学における研究と、実践真宗学における研究について、大きな示唆を与えているのが、梯實圓勧学による「真宗教義学体系」の提示である。[7]

真宗教義学体系とは、「教理史や聖典学を統合した教義学と、儀礼論、教団論を統合した学問である」とする真宗学の在り方を指している。[8]

「教義学」には、真宗教義の歴史的展開を研究する「教理史」と、教義が顕された聖典を緻密に研究する「聖典学」が欠かせないと示している。また歴史的展開のなか、親鸞聖人の開顕された浄土真宗を伝承した者の教学的な研究も欠かせないと示し、その研究は、それぞれの時代背景や、教学的課題などを抱えながら、浄土真宗を明らかにしようとする営みであり、教団が形成されてからの営みなので、教団論などにも深く関わっている。

このように真宗学は単に論理的整合性を求める文献研究だけではなく、浄土真宗という教義を自らの宗教として、この現実社会において様々な課題に直面し、対応しつつ生きていかなければならない実践的側面をも内包する、大きな体系をもつと示されている。

この体系においては、「教義」と「儀礼」と「教団」という三者を明示して、現実社会において浄土真宗という宗教が展開していることを示している。

「教義」とは、「超理性的な信が、自己を理性的な言葉で表出」した時に成立するものとし、「儀礼」とは「信心が個人的に、または集団的に身体的動作を伴って表出」される時に成立する宗教儀礼のこととし、「教団」とは「信心に基づく社会的な集団を形成」した時に成立するとしている。[9]

言語や思慮分別を超えた宗教的世界観を、言語化し思慮分別できるように体系的にあらわしたのが教義ということができるであろう。そしてその教義を顕す書物を「聖典」や「聖教」と呼ぶ。浄土真宗を研究するにあたり、

「聖典」や「聖教」を基として、研究していくことが最も重要であることは論を俟たない。

「聖典」「聖教」とは、もともと思慮分別を超えた根本無分別智や般若と呼ばれる智慧をもっている聖者の智慧から言語化されているのであり、無分別智の後に得る智慧である後得智によって成立してしていると示されている。(10)

このような「聖典」「聖教」を一読して、その文字の奥底に込められた、無分別智を体得することは容易ではない。いや迷いの存在である自らの思慮分別で読解しようとすることは、不可能といわねばならない。それ故に「聖典」「聖教」の読解は困難であり、教義の書は論理ばかりで、実践に寄与しないと批判の声を聞くことがある。

浄土真宗の聖典を英訳する事業が進捗し『英訳親鸞聖人著作集　The Collected Works of SHINRAN』が発刊された。この書の利用や感想などについて、海外に於いて伝道に従事している開教使にアンケートをしたところ、「学問には向いているが、布教には向いていない」等の意見が多く寄せられた。(11)

教義そのものを顕す「聖典」「聖教」をそのまま、布教伝道の現場に用いることは、かなり困難であることを示している。

読解困難であることは事実であるが、しかし「聖典」「聖教」は単に難解な書物というものではなく、無分別智があらゆるものを一如とし、無分別後得智が一切を悟らしめんとする、無分別智の必然的に展開であり、その無分別後得智によって成立しているのであるから、いまだ悟りの智慧を開かない者にとって、悟りへと導く伝道の意義を持っているのである。

親鸞聖人の主著『顕浄土真実教行証文類』はまさに難解な書物であるが、それは単に師である法然房源空聖人の『選択本願念仏集』に対する論難に対して、選択本願念仏の真実性を客観的に顕した書物というだけではなく、強烈に回心を迫る伝道の意味もあったと示されている。(12)

教義を顕す書である「聖典」「聖教」が、伝道の書であるという一面を持つことは、先に挙げられた「儀礼」や「教団」にも深く関連する。信心を基として、身体的動作を伴った表出を宗教儀礼とし、社会的な集団を形成しているのが教団というと示されていたが、信心を基としてて、身体的動作を伴うのは、仏前で読経することなどの宗教儀礼だけではない。

本願文には「至レ心信楽欲レ生二我国一、乃至十念。」[13]とあって、三心（信心）、十念（称名）と信行次第する「乃至十念」は信相続の易行であり、「真実信心必具二名号一。」[14]と述べて、信心の念仏者には、信心が称名念仏へと展開することが示されている。信後相続の易行は称名念仏に限らず、信心に体具された五念二利の徳が、相発するとする説がある。また、非本願の行として廃せられた行業である雑行や助業が、あるいは衣・食・住の三業までもが、往因とはならない形で称名正定業に随伴するとする説もある。

いずれにしても信後相続の行業は称名念仏と展開し、その称名念仏が略讃・広讃とあるように、称名念仏に限らず、広く仏徳を讃嘆することにまで展開するとされている。[15]

このように、宗教儀礼に限らずに信心の徳として身体的動作を伴うことがある。この意味で儀礼論は、念仏者が行うさまざまな行業について論じることになる。つまり、信心の念仏者の実践的側面にとって根本的な拠り処とするべきなのが本願であり、その本願の意を「聖典」「聖教」が顕しているのである。

そもそも仏教徒が、さまざまな課題に直面し、判断を迫られる時には、「聖典」「聖教」を拠り処として決定していくという「聖教量」が基本といわれる。これは浄土真宗における実践を研究する上で、誠に重要な点として確認しておかなければならない。

実践真宗学における研究方法を研究するにあたり、文献学的研究を中心とした教義学を根底とし、教義学とは切

り離すことなく実践的側面を研究していくことが重要であることが改めて明らかとなった。

従来の真宗学が文献的研究が中心であって、実践的側面についての研究は少ないが、しかし浄土教理史としては、善導大師が明らかにされた「安心」「起行」「作業」をもって本願信受の念仏者の起行が論じられ、また教学史としては、行信論を中心として安心門について深く研鑽しながらも、起行門である念仏者の実践について、助正論として緻密な研鑽がなされてきた。

また蓮如上人の言動などを通して、真宗伝道についての解明がなされるようになり、浄土真宗における念仏者の実践、また伝道についてもその理論的側面に関する論考は数多く提示されている。

実践真宗学研究科の研究方法としては、これら従来の研究による成果を基に、実践的側面に関する研究を進める方法を確立しなければならない。

五、実践真宗学における研究方法

教義学を基として、更に実践的側面を研究する実践真宗学における研究方法は、その学問分野は広範囲かつ多岐にわたり、多種多様な学問分野との交流が必要であることは既に指摘した。

どの学問分野であっても、実践的側面を研究する場合には、その研究対象の実態を把握することが必須である。実際に実践されている現在の状態を見聞きして把握するだけでなく、その実践が実施されることになった背景や、実践の主旨、また具体的な工夫、抱えている課題などを把握することが重要である。

また、単に傍観者の立場から、客観的に観察し実態等を把握するというだけではなく、自ら主体的に企画検討し実践することによって、具体的に研究を進めることも重要である。

これらのことを踏まえると、多種多様な研究方法が有り得るが、ここでは「客観的調査分析研究方法」と「主体的実践分析研究方法」と名付けて考察を進めたい。

研究方法の名称は、さまざまな学問分野において、それぞれの学問的性格や研究目的などの差異から、特定の定義を持たせていることが多い。

例えば「アンケート調査」「聞き取り調査」「事例研究」「実践研究」などは、一般的に用いられることもある名称ではあるが、それぞれの学問分野において、同じ名称を用いながらも、それぞれの調査方法や研究方法に、独自性がある。

「アンケート調査」などは、単にアンケートを採るという方法から、統計的に研究していく方法、共通因子を分析するなどの研究方法がある。

「聞き取り調査」にも、行政上における住民の意見を集約する調査もあれば、社会学的な視点から聞き取る調査もある、また臨床心理学の視点から分析していく研究方法もある。

「事例研究」や「実践研究」については、教育学において、特定の児童や生徒の事象を対象にして行われる研究を「事例研究」とし、学級指導や授業を実践し、問題点の抽出や、指導法の効果を検討する研究を「実践研究」とすることがある。

教育学において呼ばれる「実践研究」は、実践を研究する方法と、実践して研究する方法がある。これに示唆を受けて「客観的調査分析研究方法」は実践を研究する方法であり、「主体的実践分析研究方法」は実践して研究する方法ということができる。

それぞれの分野における学問的性格や研究目的に相応しい研究方法が採用されている。実践真宗学における研究

は、「諸科学との学際的かつ総合的・融合的な研究」を必要とするのであるから、他の学問的分野において、先行的に研究されている方法に学びつつも、実践真宗学研究科の学問的性格や研究目的に相応しい研究方法が確立されなければならない。

五―一、客観的調査分析研究方法

ここで「客観的調査分析研究方法」と提示したのは、ある実践について、客観的に調査し分析していく研究方法という意味である。具体的には量的調査と質的調査を基にして、データなどを分析し、客観的に明らかにしていく研究方法とする。量的調査と質的調査にはそれぞれの特性があり、一方だけの調査だけでは十全とは言えず、お互いの調査の長所を活かし、短所を補完することで、現状をより実態的に把握し、その背景などまでも分析し、総合的に研究することができる。(16)

量的調査は質問紙法を用いて、広範囲に多数のアンケートを行い、そのデータを統計的に処理して分析していくことが多い。その意味では統計調査ということもできるであろう。さらに共通因子を抽出していく研究方法などもある。

量的調査は研究対象の実践について、その全体像や傾向を把握するのには大きな成果が期待される。特に広範囲かつ多様な側面を持つ実践については、その実態を概括的に把握するのは困難であるから、量的調査が適していると考えられる。

また現状を把握するだけでなく。その実践が実施されることになった背景や、実践の主旨、また具体的な工夫、抱えている課題などを調査することも、質問内容の精査や調査結果の分析により可能となる。

しかし、次のような項目に留意しなければ、その調査の信憑性は失われてしまう。各学問分野で先行的に行われている量的調査には、更に詳しく留意点が挙げられているが、いまは、実践真宗学の研究方法における量的調査として、基本的な留意点を列挙しておきたい。

・調査方法について

アンケート用紙などを用いたアンケート調査法、直接アンケートする面接調査法、電話で質問する電話調査法、ホームページやSNSなどを用いたインターネット調査法などがある。それぞれに回答率や信頼度、調査対象者の負担などにおいて特徴があるので、研究目的に相応しい方法をとらなければならない。

いずれの調査方法においても、質問内容の構造化をはかり、数値化して分析しやすい質問項目を作成する。

調査の主旨を説明し、統計的に処理し個人の特定はできないことを明示する。

・調査対象について

研究目的に相応しい対象を選ぶ。

世代、地域、性別、立場など様々な要因に配慮し、偏向性が出ないように配慮する。

偏向性があったり、限定性があったりする場合は、分析時に明記するなどして配慮する。短絡的に一般化や普遍化させない。

・調査数量について

悉皆調査は信憑性が高いが実施は困難なことが多い。個人で実施困難な広大な調査については、信頼のおける統計データである国勢調査[17]や各府省庁で公開している白書（年次報告書[18]）等を利用する。浄土真宗本願寺派に関しては、「宗勢要覧」や「宗勢基本調査[19]」などを用いる。

抽出調査だと母数によって左右されるので、調査対象数を確保する。

・分析方法について

数値化して統計的処理を行う。

客観的に分析する。

平均値や割合などの数字に固執すると実態と乖離することがあるので注意が必要。

この他にも留意点は予想されるが、いずれにしても研究目的に相応するように調査をデザインし、調査対象者に負担や迷惑のかからないように配慮することが重要である。

質的調査は、インタビュー調査や参与観察によって、調査対象の内実を深く調査することができる。実地における調査であるので、実地調査とも呼べるであろう。

単に実践の実態を明らかにするだけではなく、その実践が実施されることになった背景や、時系列の関係、因果関係など、また実践の主旨、また具体的な工夫、抱えている課題などを調査する際に成果を発揮することが多い。

量的調査と同じく次のような項目に留意しなければ、その調査の信憑性は失われてしまう。各学問分野で先行的に行われている質的調査には、更に詳しく留意点が挙げられていることを理解しているが、いまは、実践真宗学の研究方法における質的調査として、基本的な留意点を列挙しておきたい。(20)

・調査方法について

インタビュー調査や参与観察などがある。

非構造化面接法、半構造化面接法、構造化面接法などがある。非構造化面接法とは、質問事項を構造化せずに自由にインタビューすることで、内面の奥深くまで聞き取ることができる可能性がある。反面、分析をしにくくなる

可能性も高い。半構造化面接法は、一定の質問事項を構造化しておいて、インタビューを行い、自由度を持たせて、内実を聞き取ることができる可能性が高い。構造化面接法は質問事項や質問方法を予め構造化しておくので、多くのインタビュー結果があっても分析しやすく、比較などが容易になる可能性がある。

いずれも長所と短所があるので研究目的に相応しい調査方法を選択しなければ成果は得られない。

参与観察は調査対象に自らが参与し、主観的に観察する方法である。実践の実際に立ち会って参与し、さまざまな内容を観察することによって、質的調査となる可能性がある。しかし、主観的である可能性が高いので、写真、ノートやメモ、録音、録画などを駆使して詳細な記録を取り、分析時に客観性を持たせる工夫が必要である。

またいずれの調査方法も単発で行うのではなく、繰り返し継続的に行うことで、初回では判然としなかった点に焦点を絞り、更に深く内実を聞き取ることができる可能性が大きくなる。

これらの質的調査の方法は、量的調査よりも調査対象に深く関わることとなり、調査対象者の負担が大きくなる。また調査者と調査対象者の間での信頼関係を構築しなければ、内実を深く聞き取る調査は成し得ない。

そのために調査依頼時から、研究や調査の主旨説明、調査の方法、日時などの確定、守秘義務の遵守、調査結果の公開における確認など、明確に書面をもって了承を得る必要がある。

・調査対象について

調査対象の精査を行う。研究目的に相応しい調査対象でなければならない。特徴ある実践ばかりが対象となるわけではない。調査対象の抽出に客観性や合理性が明らかでなければ、分析結果の信憑性が失われるので、情報収集や予備調査などをして、慎重に抽出しなければならない。

・調査数量について

分析結果の信憑性を考えると多いことに超したことはないが、数量的に多く実施し、分析することは時間的、労力的に厳しくなる。分析し成果を上げ、客観性を保つためには五名以上の調査対象者が必要かと考える。もちろん個別の事例などでは調査対象者が一名のこともある。質的調査であるので数量的信頼性もさることながら、内実を深く聞き取って分析することに力点をおくことがある。

・調査分析について

参与観察においては、調査時に取った、写真、ノートやメモ、録音、録画などの詳細な記録をもとに、客観性を保つように分析する必要がある。

インタビュー調査においては、逐語記録を作成し、研究目的に相応しい観点から特徴を抽出し、時系列の整理や因果関係などを詳細に分析する。

以上のような、量的調査や質的調査をもって、調査対象を客観的に調査して分析する研究方法を「客観的調査分析研究方法」と提示し、実践真宗学における研究方法として確立するべきと考える。

五―二、主体的実践分析研究方法

「主体的実践分析研究方法」とは調査研究する者が主体的に実践して、分析し研究していく方法という意味である。

いまここに提示した「主体的実践分析研究方法」とは、一見、客観的調査分析研究方法の質的調査における参与観察と似ている感があるが、参与観察は、調査対象に自ら参与し経験を得るが、どこまでも観察する調査であって、調査研究する者が自ら主体的に実践して、分析し研究していく方法とは異なる。

主体的に実践することで、客観的調査分析研究方法では見いだせなかったことが、明らかになることがある。その具体例を示したのが、次の実践者たちの言説である。

実践真宗学研究科において、開設以来毎年一回の公開シンポジウムが開催されている。

二〇一三年度のシンポジウムでは「現代社会の苦悩に寄り添う〜宗教者に求められているもの〜」と題して開催された。[21] 実践真宗学研究科において、さまざまな実践を展開している院生、特別専攻生が、現代社会において、寄り添い、傾聴、支援などの活動を展開している。それらのバラエティに富んだ活動を紹介しつつ、現代社会が宗教や宗教者にもとめるニーズを明らかにするという主旨のシンポジウムであった。

紹介した実践は、いずれも仏の心を聞いた者が、人の声を聞き、その心に応じようと模索している実践であった。五名の実践についてビデオ紹介するために、「活動内容」「活動のきっかけ」「活動での配慮」「宗教者として」などの質問事項を構造化して、延べ七時間に及ぶ取材をおこなった。そのインタビューによると、それぞれ主体的に実践して、初めて見えてくることが多々あることが明らかとなった。

紹介した実践は、次の五つである。

① 京都自死・自殺相談センター：霍野廣由（特別専攻生）
浄土真宗本願寺派が母体となって、死にたいほどの悩みを抱える方の声に耳を傾ける民間の機関（特定非営利活動法人）。電話相談をはじめ、語り合う会、シンポジウムを開催。相談活動に従事。

② 東日本大震災復興支援：西池深音（三回生）
震災復興支援として、ボランティアで活躍。瓦礫撤去から、遺体安置所での読経。追悼法要などの実践を展開。

③ グチコレ：藤原邦洋（二回生）

様々な場所で多くの人の愚痴を聞く。現代社会と宗教者の接点・意義を模索する。愚痴をホームページ（他力本願.net）で世の中に共有することによって、現代人の抱える孤独という問題を解決しようとする活動。

④　自死に向きあう関西僧侶の会：霜尾吏澄（特別専攻生）

自殺（自死）遺族の心のケアを中心に活動する、関西圏の僧侶有志による超宗派の団体。安心して語れる「いのちの集い」や、追悼法要を勤修。

⑤　あそかビハーラクリニック常駐僧侶（ビハーラ僧）：田丸裕昭（四回生）

財団法人大日本仏教慈善会財団の緩和ケア・ビハーラ（仏教ホスピス）病棟「あそかビハーラクリニック」が設立され、緩和ケア病棟におけるスピリチュアルペインに対し、宗教的ケアを行う常駐僧侶（ビハーラ僧）の研修が実施されている。「あそかビハーラクリニックにおけるビハーラの理念をもとにした僧侶研修制度」を受講。

これらの主体的実践を通して、客観的な調査や分析では見えてこないことが、多々あった。簡略に紹介する。

①　京都自死・自殺相談センター

一人では処理できないほどの相談を受けた時など、自らが浄土真宗の念仏者であることに支えられる。完全なる支援ができず苦悩することがある中で、不完全な自らが救われる浄土真宗が基盤となって、活動を継続することができ、また、如来の慈悲を完全に行ずることは不可能であるが、活動の指針となっていることを知ることができた。

②　東日本大震災復興支援

宗教を伝えるための活動ではなかったが、どこまでが伝道で、どこから伝道にならないのかの境界線が不明であることを知った。こちらを僧侶ということを知った方から、宗教者として相談を受けることがあった。浄土真宗においては心配することがないようなことも、自らの宗教を押しつけるのではなく、相手の思いを踏みにじらないよ

うに配慮することの重要性を知った。

③　グチコレ

路上で愚痴を聞いているのが、僧侶だということを知って、愚痴が言いやすくなっている現実がある。宗教者に対する何かしらの思いがあることを知った。

④　自死に向きあう関西僧侶の会

遺族の方に安心してもらうために、クローズドな関係性の中で活動することの重要さを知った。追悼法要に参拝した遺族からは「仏の前では、全てのいのちは平等である」という一言を聞くために毎年参拝していると聞いて、僧侶の言動の重要さを思い知った。

カウンセラーや医師とは異なった安心感が僧侶にあることを知った。

⑤　あそかビハーラクリニック常駐僧侶

緩和ケアには、さまざまな専門職が関わっているが、僧侶であるからと悩みを明かされることがある。医師や看護師などとは、違った意味で頼りにされている一面があることを知った。

このように、傍観者的立場から、客観的に調査し分析する研究方法だけでは見えてこない一面があることが明らかである。

「主体的実践分析研究方法」は、実践真宗学における研究方法の一つとして有効的で、重要な研究方法ということができるであろう。

この「主体的実践分析研究方法」は教育学において呼ばれる「実践研究」に示唆を受けたと述べた。教育学における「実践研究」において課題とされていることがある。

分析研究する者が主体的に実践することを通して研究を行うということは、調査研究者の主観に大きく左右される可能性がある。それは客観性や批判性を乏しくし、合理性をも失うと単なる実践報告になってしまい、研究ということからは大きく逸脱してしまう。この課題を克服するためには実践者と研究者が協力して研究を進めていくという方法が指摘されている。(22)

このように、実践者と研究者の協力をもって実践研究を行っても、必ずしも完全な客観性や合理性を保証できるものではない。なぜなら、実践しつつ調査研究して得たデータは、心情や精神的な変化なども含まれ、実際に実践をしてみた感想のようなことも調査結果とすることがある。これらのデータは必ずしも数値化して統計的な処理をすることなどは困難であるからである。

実践真宗学における「主体的実践分析研究方法」には、客観性や合理性をはかる基軸がある。さまざまなデータがあり、各々の質や量、また方向性にばらつきがあり、容易に分類や関係性を見いだせなくとも、一つの基軸があれば、その基軸からの距離をはかり、またその基軸に対しての方向を見定めることができ、データの方向性も明らかにすることができる。つまり調査したデータだけで分類し関係性を見いだし、分析することができなくとも、調査データの全体に対する基軸が存在すれば、その基軸を客観性と合理性の基とすることができる。

実践真宗学における研究方法の基軸は、既に述べた通り、文献学的研究を中心とした教義学である。この教義学を基軸として、主体的に実践して得た分析データが、浄土真宗の教義から見て、どのような質を持っているのか、どのような方向性をもっているのか、またそれぞれのデータの関係性までを分類し分析することが可能となる。

このように、主体的な実践を通しての分析研究には、客観性や合理性が乏しくなるという脆弱さがあるとされているが、実践真宗学においては、教義学をもって克服することができると考える。

いわゆる「聖教量」をもって分類、分析を行うということで、客観性や合理性を持った研究となり、実践真宗学における研究方法として有意義であると考える。

まとめにかえて

実践真宗学の研究が本格化し始めて、まだ間がない。当然まだその研究方法の全てが確立しているわけではない。この小論では「客観的調査分析研究方法」と「主体的実践分析研究方法」を提示して論じてきた。

実践真宗学の学問分野は広範囲かつ多様性をもっているので、今後も多種多様な学問分野との交流を続けなければならない。研究方法も多様化していくことが推測される。

しかし、実践真宗学における研究方法は、実践真宗学の根底を支える浄土真宗の教義を基軸としつつ、研究されていかねばならない。

そこにこそ「諸科学との学際的かつ総合的・融合的な研究」が確立すると考える。

註

（1）参照：龍谷大学　実践真宗学研究科　ホームページ http://www.ryukoku.ac.jp/faculty/graduate/practical_shin/introduction.htm　二〇一三年一一月三〇日

（2）実践真宗学研究科において開催された特別講義とビハーラクリニック見学等による知見。

（3）拙論「安心論題の現在性」（『浄土真宗総合研究』第六号・本願寺教学伝道研究センター・一七―二七頁）に詳細を論じた。

（4）内藤知康著「実践真宗学研究科設立の意義」（『龍谷大学論集』四七六・四七八号・二四頁）

（5）内藤知康著「実践真宗学研究科設立の意義」（『龍谷大学論集』四七六・四七八号・三五頁）註二を参照した。

（6）桐溪順忍著「真宗学に関する雑録」（『救済の論理』教育新潮社・一九八三年・第二版・五一九頁）

（7）以下の論述は、梯　實圓著『教行信証の宗教構造　―真宗教義学体系―』（法蔵館、二〇〇一年・（以下、『宗教構造』と略す）i～vi頁）を基にして論述した。
（8）『宗教構造』（v頁）
（9）『宗教構造』（i頁）
（10）梯　實圓著「聖典による学び　―聖典拝読の心得―」（『浄土教学の諸問題』下巻・永田文昌堂・一九九八年・三四一―三五四頁）を参照した。
（11）高田文英・日野慶之著「海外開教使「布教・伝道に関するアンケート」の集計と分析」（『浄土真宗総合研究』第三号・本願寺教学伝道研究センター・一六二頁）
（12）『宗教構造』（iii頁）
（13）『浄土真宗聖典全書』（二・宗祖篇上・六七―六八頁）（読解の便の為、字体を改めた。以下同様）
（14）『聖典全書』（二・宗祖篇上・九〇頁）
（15）拙論「真宗伝道における実践論の教義的研究」（『眞宗研究』第四九号・真宗連合学会・一二―二四頁）において詳細を論じた。
（16）拙論「浄土真宗における伝道活動の実践的研究　―統計調査・実地調査を踏まえて―」（『真宗学』一二七号・一八―四八頁）にて、量的調査や質的調査のデータを基にした研究を行った。
（17）参照：総務省統計局ホームページ http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/　二〇一三年一一月三〇日
（18）参照：首相官邸ホームページ http://www.kantei.go.jp/jp/hakusyo/index.html　二〇一三年一一月三〇日
（19）浄土真宗本願寺派『宗報』五三三号（本願寺出版社・二〇一一年八月）
（20）『寺院活動事例集ひろがるお寺：寺院の活性化に向けて』（浄土真宗本願寺派総合研究所・二〇一三年）の調査、分析、執筆、考察などの研究を通しての留意点。
（21）二〇一三年一一月二一日（木）、京都アバンティ響都ホールにて、基調提言に島薗進氏、磯村健太郎氏を迎えて開催された。その内容は『龍谷大学大学院実践真宗学研究科紀要』に掲載予定。
（22）山西優二著「第5章 実践者による実践研究の意味（論考 実践者による実践研究）」（『シリーズ多言語・多文化協働実践研究』東京外国語大学多言語・多文化教育研究センター・第一一号）を参照した。